

第2章 層位と遺構

1 層位

調査当時の地表は、東北部で標高47.0m、西南部で46.5mをはかり、わずかに西方鴨川に向かって下がるが、ほぼ平坦な土地である。旧建物が存在した間の堆積が、元来表土とみなされるべきであったが、建物解体直後の第1次調査では、その最上層は瓦礫や廃材とともにひどく攪乱を受けていたため除外し、それ以下の土層を層位として記録した。しかし、第2次調査では、それ以後1年近くを経過していたので、解体時の最も新しい堆積を含めて、広範囲にわたる近代の攪乱層を表土として実測している。

(1) 第1次調査区の層位(図版1・6・7)

東西方向の層位をA—A'間(A1～A9層)とB—B'間(B1～B7層)で(図版6)、南北方向の層位をC—C'間(C1～C6層)とD—D'間(D1～D7層)でみる(図版7)。

基本的には、近世後半期以降の黒色の耕土層(A1, B1・B2, C1・C2, D1・D2)と、平安中期以前の氾濫による堆積と考えうる砂礫層(A7～A9, B7, D6・D7)とのあいだに、平安後期から室町中期ごろまでの遺物包含層を認める。東半では、これが比較的良好に遺存しており、遺物が最も多く出土し、また遺構も多数検出できた。

A—A'間でみると、近世耕土の下には、まず、ごく薄い淡灰色のA2層が存在する。遺物の出土量が少なく、年代を定めにくい、同様の埋土を伴う建物遺構SB01を検出しており、近世には降らないと考える。

A3・A5層がその調査区における最も標準的な遺物包含層で、この2層は、色調、土質とも類似するが、黄褐色砂A4層を部分的に介している。A3層は、おもに、中世京都Ⅱ期^(a)ごろの土師器を出土し、A5層は平安京Ⅳ期から中世京都Ⅰ期ごろにかけての土師器が出土した。A6層は、このあたりに主要な遺構が形成される直前の堆積で、遺物は少ない。平安後期に、このあたりが開発される際の整地のために盛られた土層である可能性が強い。溝SD09がその直後の遺構であることが観察できる。

A7層以下は、この辺りがまだ高野川の氾濫にしばしば被われたころの堆積と考えられる。東寄りほど砂層の堆積が厚く、西に向かってしだいに粗い砂礫となる。

他の3区間の層位を、A—A'間との対応の上で観察しておく。B3層はA—A'間にない砂礫層で近世陶磁器を多数出土する。この堆積は南北に带状に広がり、第2次調査区内

にも検出できる(図版8-E5層)。B5層とD3層はともにA2層から連続する層位で近世までの堆積とみなしうる。B4層は、それらとは異質で、礫混りの粘質土であるが、層位のうえからやはりA2層に対応するのであろう。

さらに、D4層はA3層に、B6・C4・D5層はA5層に対応する。溝SD18の埋土ともなっているC5層は、A6層と併行するか、もしくはその直後ごろの堆積とみなすことができ、そのことは、出土遺物のうえからも、本遺跡の中でも古い遺構群に属するといふ知見と符合する。

C4・C5層の直下には、A7層よりさらに粘質に富むC6層があって、このあたりの遺構面を形成しているが、B-B'間ではこれらのような粒度の小さい土層が観察されない。つまり、本遺跡の最下遺構群は、北東から南西にかけてシルト質から礫へと漸移的に堆積の変化する水成層の上面に形成されたと考えることができる。

(2) 第2次調査区の層位(図版1・8)

東西方向をE-E'間(E1~E16層)で、南北方向をF-F'間(F1~F10層)で土層の堆積をみる。E13層およびF8層の砂礫上面が、この調査区の最下遺構面にあたる。さらに調査区西南部ではそこに営まれた多数の井戸や小河川SX07が、後の氾濫による砂礫(E10・F7層)に埋れる。これらの砂礫層と、近世以降の耕土の下面との間隔は、あまりないが、そのあいだの堆積は変化に富んでいる。遺物の出土量は極めて少なく、そのため各層位の年代の判定は難しい。

一応、第1次調査区の層位と比較しながら、各層位の年代観を整理してみる。近世耕土層が2層にわたるのは第1次調査区と同様であるが、F3層のような、2枚の耕土の中間に当る層位は第1次調査区ではみられなかった。この土層では大ぶりの礫多数と粘質土が固くしまっており、氾濫層とも考えられず、西南側が一段下がることからみても、道路として盛られた可能性が強い。E5層は、先のB3層に連なると考えている砂礫層で、近世後半の流路であった痕跡と思われる。

次いで、黄褐色土(E6・F5層)、茶褐色土(E7・F6層)も第1次調査区には現われず、中世京都Ⅱ期ごろの土師器が少量含まれるが、若干年代はそれより降る可能性がある。E8層の砂礫の堆積は、E5層をもたらしした流路に先行する堆積であろうか。またはSD23に関連した堆積物かもしれない。E9層は、第1次調査区ではA3層など広くみられた層位に類似し、年代も対応するとみてよい。E11層は、調査区の西南部のごく一部に限られる土層であるが、これが第1次調査区で多量の遺物を出土したA5層に相当する。

E12層はさらに限られた層位であるが、平安京Ⅳ期の良好な資料を出土している。

E11・E12層を削って細砂層の堆積をみせるのが、小さな流路S X07である。これは、そのすぐ西側をかつてもつと大きな流れS X06のあった痕跡である。このS X06の内の砂礫層は、南北方向に沿って貼り付けられた青灰色粘土帯によってその東側の砂礫層と隔てられている。S X06内からは、平安京Ⅱ期の遺物が少量出土し、E13層以下の砂礫からは磨滅した弥生土器片や奈良時代の須恵器片がわずかに出土した。F 8層以下の砂礫は、このE13層以下に連なる。なお、S X06の流路は、第1次調査区内にも及んでいるはずであるが、確認できなかった。

2 遺 構

2次にわたる調査により、室町時代までの遺構として、建物(SB)、柵(SA)、溝(SD)、井戸(SE)、土坑(SK)、石組および河川など(SX)を検出した(図版5・9～15)。ここでは、各遺構を種類ごとに記すにとどめ、時期別の組合せやその変遷については、後の第5章にゆずる。これらより新しい明治時代までの遺構も多数検出したが、一部は個別に説明し、そのほかは後に一括して略述する(図版4、図7)。

(1) 建物、柵

SB01(図版10・12-3) 等間隔に南北方向に並ぶ2列の柱穴群である。中世京都Ⅱ期ごろと考えている赤褐色土(A3層)より上位で検出した。各掘形は直径0.3～0.5mのほぼ円形をなし、埋土はA2層に類似する灰色土で、柱あたりはいずれも確認していない。柱間は等しく、桁行で1.80mをはかり、8間分を確認した。梁行は2.30m。西側の柱列のみ、さらに北へ2間分を検出したが、その北、およびそれらに対応する東側の柱列があったかどうか確認できなかった。南端では、この2列と直角方向に東へ連なる2間分の柱跡を検出したが、さらに東については不明である。ただし、その柱穴間隔は2.30mより小さい。柱穴内より、土師器小片、石鍋片を若干採集したほか、漆接ぎによって補修された青磁の壺蓋が出土した。

なお、この建物の桁行方向は、方位を真北から約3°西へ振る。層位のうえから、この建物の廃絶期間は、室町前期を遡りえないが、京都大学構内では、その方位はこの病院構内のしかも鎌倉前期以前の遺構にのみ特徴的に示されることは注意すべきである。すなわち、このSB01にあたる建物の創建自体がかなり遡るか、少なくともより古い時期の遺構が、室町時代にはまだ存在していて、SB01の方位を制約したかが考えられるからである。ただSB01には建て替えられた痕跡は認められず、後者である可能性が強い。

SA01(図版10・12-2) 前述のSB01の東側の柱列にほぼ沿って柱穴が1列に並ぶ柵である。平均1.98mの柱間7間分を検出したが、さらに南北に続く可能性がある。A5層の堆積の後に設けられ、掘形の1つが後述する溝SD13を切る。柵として、東西を区画する意味があったとすれば、SB01の前身という見方が有力であるが、方位は逆にわずかに東に振る。

SA02(図版9) 3度の建て替えを認めうる柱穴列である。一部に小ぶりの石の礎板をとどめており、南側に0.1mほど落ちる段があって、後代の削平を考慮すれば、対応する柱列があったかもしれない。柱間は2.4~2.5mで、東西にさらに延長している可能性が強い。わずかに西に振る方位を有し、南側の溝SD18にほぼ平行する。

(2) 溝

SD01(図版9) 幅0.5m、深さ0.2mの小規模な溝で、こぶし大の礫が埋土に多数混じる。遺物は土師器が少量出土しており、中世京都Ⅰ期中段階ごろの溝とみられる。

SD02(図版9) 幅0.9m、深さ0.3mで、南へは延長するが北のAF14区には延長しないようである。小礫の多い暗灰色の埋土には、ほとんど出土遺物がなく、年代は決定しえないが、後述のSD03に併行するか、むしろ先行していた可能性があり、短時日のうちに埋ったのであろう。

SD03(図版9) 幅1.1m、深さ0.35m。X=840以南では攪乱のため確認できなかったが、第2次調査区で検出した溝SD23に連なると考えうる溝である。室町時代に再掘された形跡があるが、出土遺物の多くは平安京Ⅳ期から中世京都Ⅰ期にかけての資料であり、特に軒丸瓦2点を含む瓦類が比較的まとまって出土した。そのほか、土師器、陶磁器類からみて、中世京都Ⅱ期には埋ったようである。方位を真北から約2°50'西に振っており、SD23も同様で、両溝の総延長は56mを越えるほどになることから、路面自体を検出していないものの、道路に伴なう側溝とみなしている。

SD04(図版10・13-4) 幅1.2m、深さ0.3m。真東西方向に約10m検出し、それ以上西へも東へも延長せず、両端とも南へ直角に屈曲する。「コ」の字型または矩形にめぐる溝の一辺と考えうる。また東端では、後述の溝SD08の延長部に接続している。A6層上面で検出した遺構群の中では最も新しい時期の遺構で、中世京都Ⅱ期ごろにあたる。

SD05(図版10・13-1) 石組SX02付近を西端とし、ここから東へ約12m続いて北へ直角に屈曲する。屈曲部から北を溝SD08としているが、底面近くの埋土の状況からみて、両溝は同時に掘削されたとみてよい。D-D'間の層位にこの溝の断面が観察される

(図版7)。出土する土師器は中世京都Ⅱ期古～中段階ごろにあたり、前述のSD04よりはやや早く埋った溝である。方位は、北辺が真東西であるが、溝幅が東ほど狭くなっており、溝全体としてわずかに真北から西に振る。

SD06(図版10・13-1・16-2) 溝状の遺構であるが、東は溝SD08には至らずに立ち上がり、西端は南北畔の中で終わっているようで、D-D'断面には現われない。溝というより、帯状の土坑というべきかもしれない。南肩の数カ所の部分で、南に突き出しており、これを杭状の施設の痕跡ともみなしうる。埋土は単調で、短期間のうちに埋ってしまった様相を呈しており、中世京都Ⅰ期新段階の良好な一括資料が出土している。

SD07(図版10) 幅0.8m、深さ0.3mで、東端で溝SD08に接続する。西端は南北畔のすぐ西側で立ち上がる。埋土中に遺物はほとんどないため、年代は定め難いが、SD08が存続していた最末期ごろの短期間の溝と考えている。

SD08(図版10) 幅0.5m前後と狭いが、すどく掘り込まれた溝である。SD05とひと続きの溝で、その屈曲部からは、底面が一段高くなって、さらに南にのび、SD04の東端と連絡する。またSD07も、その東端でこれに接続している。中世京都Ⅱ期古段階の遺物を出土するが、埋土の堆積状況からみて、その前後に幅をもつ存続年代を考えたい。

SD09(図版10) 幅1.9m、深さ0.45mをはかる溝である。底面直上に粘土、その上にA5層類似の埋土が堆積し、さらに黄褐色砂によって完全に埋まる。調査区南壁から北へ約3mにわたり、埋土上面にこぶし大の礫が、ぎっしり敷きつめられていた。埋土の状況からも、出土遺物のうえからも、この溝は平安京Ⅳ期から中世京都Ⅰ期ごろまで存続していたことがうかがえる。この溝の北端はゆるく立ち上がり、後述の溝SD11の末端と不連続ながらもほぼ接しており、SD11からの溢水を受けていたようである。SD09の方が先行していたが、埋没時期は両溝同じところとみなしうる。なお、この溝の方位は、真北から3°前後西に振っており、前述の溝SD03と平行している。

SD10(図版10) 溝SD09の東側に接するように平行する小溝。平安京Ⅲ期新段階から平安京Ⅳ期中段階の土師器を若干出土しており、SD09に先行するか、少なくともそれよりも早くに埋れてしまったようである。

SD11(図版10・12-1) 先の年報[京大調査会77]において、池SG11として報告した遺構である。東西幅は5m前後で、両肩とも少々入り組んでおり、東半分の底が柵状にやや高くなっている所には、ひとかかえほどもある数個の石が組まれていた形跡がある。苑池の跡である可能性があるものの、未だに確証は得ていない。埋土は、底面に貼りつく

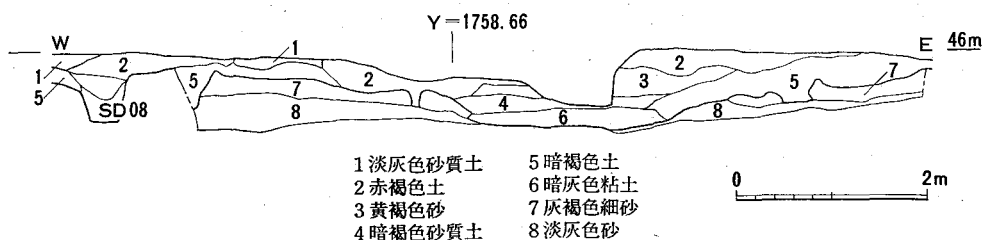


図3 溝SD11層位図

厚さ20cm前後の粘土層から、最上層のほとんど無遺物の黄褐色砂まで、前記SD09と類似した堆積状況を示しており(図3)、かなり長期にわたって水をたたえていたことがうかがえる。平安京Ⅳ期新段階に掘られ、中世京都Ⅰ期中段階まで存続したと考えている。溝SD08との関係とは別に、後述の溝SD18とどのように関係するかという視点をも含めて、この北方未発掘部分の調査の機会が待たれるところである。

SD12(図版10) 幅0.7m、深さ0.2mで、前記の溝SD05をまっすぐ東に延長した方向に掘られている。しかしこの溝は、西端で前記SA01と交わるあたりで確実に消滅し、SD05の東端とは10mほど離れる。出土遺物のうえから、このSD12は中世京都Ⅰ期中段階ごろには埋っていたようで、その時期はSD05より古い、同一直線上にあることは、これらをまったく無関係とはみなし難い。また、溝より南で柱穴状の小坑が多いことも両者共通する。おそらく、SD05はSD12の方位をふまえて掘削され、それらはひとつの街区境界線に沿うものではなかったろうか。2つの溝が共有できる直線を図上に描くと、これが正方位から西へ $2^{\circ}30'$ ないし $2^{\circ}40'$ という値を得ることも、前述した溝SD03の方位の振りとはほぼ一致するという点で興味深い。

SD13(図版10・13-2) 東部では溝肩が消えてしまうほど、残りの浅い溝である。また西方ほど幅は狭くかつ不規則に屈曲し、そのまま溝SD11に落ちこんでゆく。こぶし大の礫多数とともに、平安京Ⅳ期新段階にあたる土師器皿が多数投棄されていた。

SD14・SD15・SD16・SD17(図版10) SD14を除く3条は、いずれも方位を若干東に振り、ほぼ2m間隔で互いに平行する小溝である。SD14のみほぼ正方位でSD13に接続する。4条とも長く続くとは考えられず、もちろん水をたたえていた形跡もない。何かの抜き跡のようにも思えるが、出土遺物もほとんどなく、年代、性格とも不明である。ただ方位の点からのみ、SA01に併行する可能性があることに気づくだけである。

SD18(図版9) 幅は約2.5mと広いが、深さは0.25mという浅い溝である。北側に

0.1m 程度の段差が見られることから、このあたりがかなり削平されたことが知られ、元来相当に立派な溝であったと想像される。方位を西に振り出土遺物が平安京Ⅳ期中段階にあたることから、この遺跡の最も古い時期を再現するうえで、注目すべき遺構である。

SD19・SD20・SD21(図版11) いずれも小規模で、非直線的な小溝である。E-E'間の層位(図版8)や、互いの切り合い関係から、SD20が最も古く、次いでSD21、SD19の順に新しくなる。このうち、SD19は、井戸SE12が埋って後の溝であり、かつこの井戸は後述するように、中世京都Ⅰ期古段階ごろに埋ったとみることができる。SD19の北西端付近には、SE12より新しい井戸SE11やSE15が存在し、この溝は井戸に付属する排水施設である可能性が強い。また、SD20も井戸群を囲むように折れ曲る溝で、その南西端付近には、平安京Ⅳ期中～新段階の井戸SE16や中世京都Ⅰ期古～中段階の井戸SE16がある。SD21も形態的な特徴からみて、SD19やSD21と同様の機能を有する溝と思われる。

SD22(図版11) ほとんど掘り込まれておらず、幅約2mの両側に沿って大小の石列が配されているだけで、溝と呼ぶのは妥当ではないかもしれない。薄い細砂の堆積があり、中から土師器の小片等を若干出土したのみで年代は判定し難い。ただし、SD23が埋まってから後で、かつSD25に連なる砂礫層の堆積よりも以前の遺構である。

SD23(図版11) 第1次調査で発掘された溝SD03の延長上に、第2次調査で検出した溝である。SD03とはその方位のうえからも、中世京都Ⅲ期新段階ごろに再び掘りなおされた形跡をもった点までも同様である。井戸SE26が埋って後に掘削されたことは確実に、井戸が平安京Ⅳ期中段階の遺構とみなしうることから、溝の年代の上限を定めることが可能である。また、この溝の上層の粘土中からは、下層とかけはなれた時期の遺物が若干出土しており、その時期が後述のSD24とほとんど差のないことが注意される。ただし南半では、上層粘土の堆積はない。

SD24(図版11・13-3) 幅1.1m、深さ0.6mで、極めて整った逆台形状の断面を有し、他の溝と比べても、極めて直線的な溝である。形状が崩れていないのは、それだけ短命であったのかもしれない。埋土のほとんどは黄褐色の粘土で、その中に完形に近い羽釜類が数点埋っていた。正確に真南北方向に掘られており、X=879.9付近で急に立ち上がり、南へは続かない。中世京都Ⅲ期新段階にあたる土師器が出土している。

SD25(図版11) 図のうえでは北端にのみ描かれているが、東西の肩がこのあたりのみ明瞭であるにすぎない。しかし、ここから南へ、SD23を被うように広い幅で帯状に小

礫混りのよくしまった青灰色砂が堆積しており、これもまたSD25の延長と考えている。この砂層を切るかまたは被うように、多数の陶磁器を出土する近世後半期の砂礫層E5層が堆積している。このことと、少量の遺物から、SD25は室町時代ごろのものと考えている。

(3) 井戸

40基の井戸と野壺を検出した。遺構平面図の中には、両者ともSEの記号で表わしたが、そのうちSE33～SE39は近世以降の野壺である(図版9～11, 図7)。検出した井戸は、石組の有無、内筒の有無などで以下の7種に分類した。素掘りの井戸で内筒のあるA1a類(図版14-1, 図4-SE26), 素掘りの井戸で内筒のないA1b類(図版14-2), 素掘りの井戸で方形木枠の痕跡があるA2類(図版14-3), 円筒形石組の井戸で内筒のあるB1a類(図版14-4, 図5-SE11), 円筒形石組の井戸で内筒のないB1b類(図4-SE12, 図5-SE03, SE32), 上部が拡がるように石を構築する逆円錐台形石組(朝顔形)の井戸で内筒のあるB2a類(図版14-5, 図5-SE19), 逆円錐台形石組の井戸で内筒のないB2b類の計7種である。

SE13, SE23, SE25, SE26はA1a類, SE02, SE04, SE06, SE09, SE

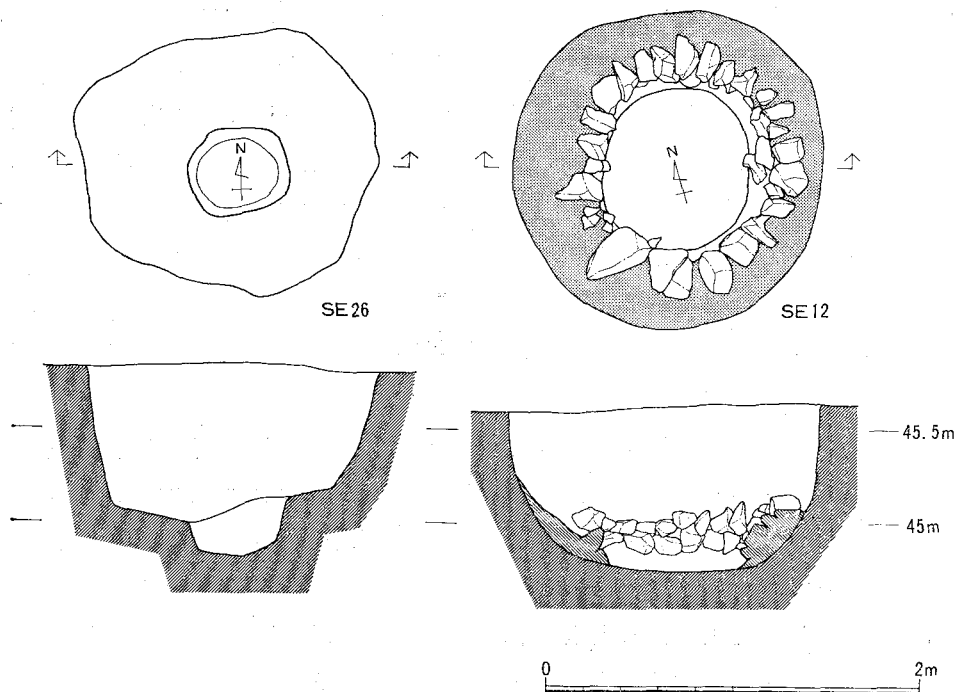


図4 井戸SE26・SE12実測図

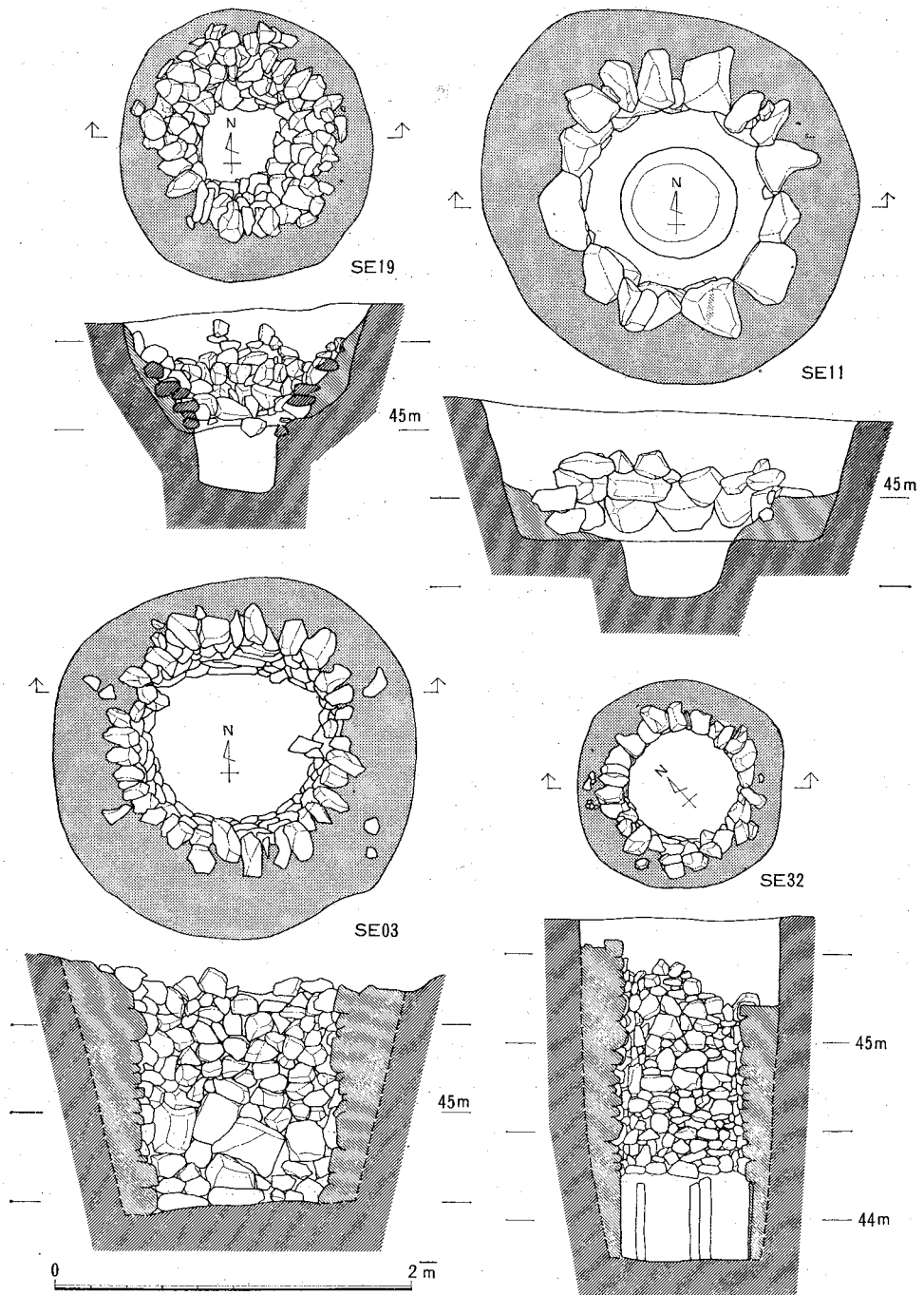


図5 井戸SE19・SE11・SE03・SE32実測図

15, SE16, SE17, SE20, SE22, SE27, SE28, SE29, SE40はA1b類, SE18, SE24, SE31はA2類, SE11はB1a類, SE01, SE03, SE05, SE07, SE10, SE12, SE21, SE30, SE32はB1b類, SE14, SE19はB2a類, SE08はB2b類である(表1)。

井戸を集中して検出した第2次調査区北半については、井戸の年代を表1で示したが、それ以外の井戸で年代が確定できるものは、SE01, SE02, SE05, SE21, SE28, SE32が近世京都Ⅲ期(江戸後期), SE03が中世京都Ⅱ期古段階, SE08が中世京都Ⅰ期中段階, SE09は平安京Ⅳ期新段階である。

前述の7種の形態差が時期差になるかを検討すると、表1でみるように、素掘りで内筒のあるA1a類は平安京Ⅳ期中段階で終り、石組の井戸B類が同じ時期から始まることがわかる。また、B1b類では、掘形が大きく石組に用いる石も大きい井戸(図4-SE12)は平安～鎌倉時代で、掘形が小さく石組に用いる石も小さい井戸(図5-SE32)は江戸時代である。しかし、以上の2点以外は時期差を示すものではなく、逆に、表1の各時期別の種類でみるように、平安京Ⅳ期中段階～中世京都Ⅰ期新段階では、素掘りの井戸A類と石組の井戸B類を同時期に使用したと考えうる。

そこで各時期、各種類の井戸がどのように分布するかを、図6で示す。図6左には平安京Ⅲ期新段階～同Ⅳ期新段階の井戸、図6右には中世京都Ⅰ期古段階～同Ⅰ期新段階までの井戸を図示した。各井戸は3段階にまたがることはなく、使用期間は60年以内と考えうる。各時期の井戸は1～3基であるが、2つの時期にまたがる井戸のうち1基のみの井戸を前後の時期の井戸と対応させると、各時期の井戸は2基ないし、3基となる。唯一3基の井戸がある平安京Ⅳ期中段階は、素掘り井戸から石組井戸へ変化する時期で特殊と考えると、井戸2基が対になることが原則になっていると考えてよい。すなわちSE25とSE13, SE22とSE40, SE29・SE30とSE26, SE16とSE14, (SE14)とSE18, SE12とSE17, SE24とSE19, SE11とSE15の約240年間8対の井戸群である。そして、石組井戸が出現した平安京Ⅳ期中段階以降では、素掘り井戸と石組井戸とが対になるといえる。さらに、このように対になる井戸では、石組井戸は常に素掘り井戸より西から南ないし南東方向にある。このことは、相対的には石組井戸を白川扇状地の端部方向に造っていることを示している。

井戸の位置では、平安京Ⅳ期古・中段階の井戸が東端に多いが、それ以降の井戸は西半に多く溝SD23を東に越えることがない。SD23は第1次調査区のSD03に続く検出長56

表1 井戸の時期と分類

時 期		井 戸 名	井 戸 の 形 態	掘 形 の 径	井戸底の標高	内筒底の標高
平安京Ⅲ期	新	S E25	素掘円形 A1 a	1.5m	45.50m	45.00m
		S E13	素掘円形 A1 a	1.3m	45.07m	44.35m
平安京Ⅳ期	古	S E22	素掘円形 A1 b	1.35m	44.80m	—
		S E40	素掘円形 A1 b	—	—	—
	中	S E26	素掘円形 A1 a	1.5m	45.10m	44.80m
		S E29	素掘円形 A1 b	1.3m	45.08m	—
		S E30	石組円形 B1 b	2.0m	44.80m	—
	中～新	S E16	素掘円形 A1 b	1.6m	44.85m	—
		S E14	石組朝顔形 B2 a	1.1m	45.21m	?
	新	S E18	素掘方形 A2	1.1×1.4m	45.13m	—
中世京都Ⅰ期	古	S E12	石組円形 B1 b	1.9m	44.75m	—
	古～中	S E17	素掘円形 A1 b	1.6m	44.98m	—
	中	S E19	石組朝顔形 B2 a	1.5m	45.00m	44.70m
		S E24	素掘方形 A2	1.4×1.4m	44.87m	—
	中～新	S E11	石組円形 B1 a	2.0～2.3m	44.80m	44.45m
	新	S E15	素掘円形 A1 b	0.8m	44.75m	—

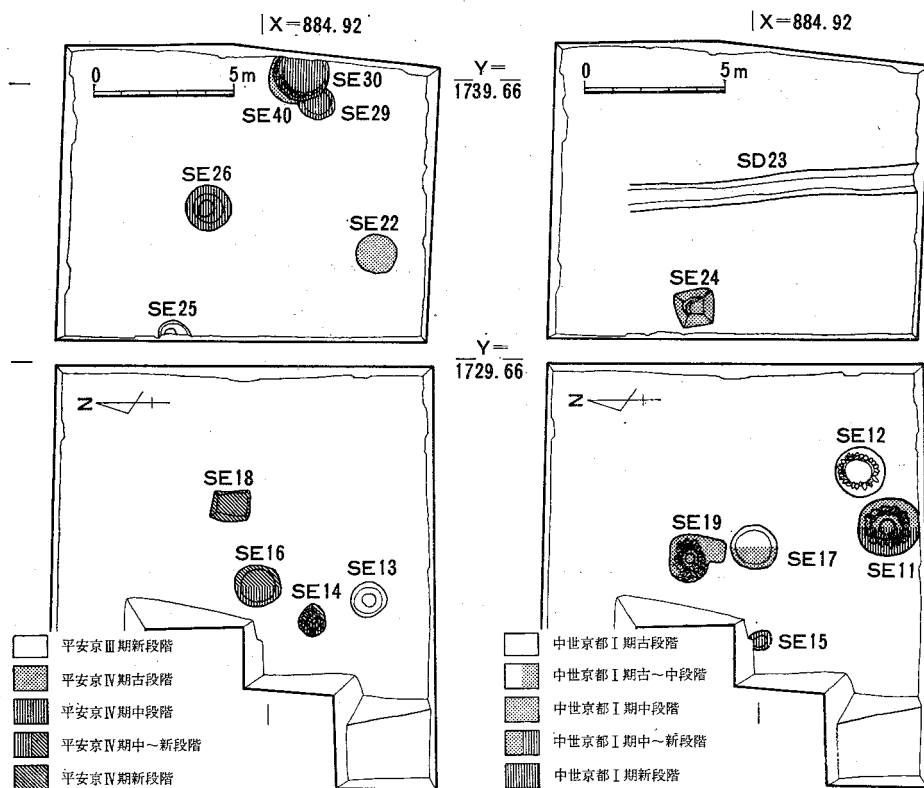


図6 井戸配置図(左:平安時代, 右:鎌倉時代)

mの溝で、道路の側溝の可能性を考えている。平安京Ⅳ期中段階以前の井戸の位置と同中～新段階以降の井戸の位置が明確に変わることから、SD23が道路の側溝か敷地割の役割かをもっており、井戸の位置を規制したと考えることができる。

各井戸底面(内筒部は除く)の標高から推測した地下水位は、平安京Ⅲ期新段階～中世京都Ⅰ期新段階では、上下に変動しているが(表1)、近世の井戸はこれらの時期より約1.5mほど低い。いつ地下水位が下がるかが問題である。

(4) 土坑

土坑ということで一括したうちには、その形状や遺物の出土状況などの点においてある程度の類別が可能である。SK01, SK08, SK10はあまり深くはないが、多数の土師器が不定形な範囲に拡がりをもって出土する、土器溜である。SK01はB6層より下で検出しており、その土師器は平安京Ⅳ期にあたる(図版9)。SK08, SK10は、A5相当層より上から掘り込まれた土器溜で、中世京都Ⅱ期中～新段階のものである(図版10)。

SK02, SK03, SK05, SK06, SK07は長円形ないしはそれに近いしっかりした形状と深さを有するが、遺物の出土は少ない(図版9・10)。これらのうち、SK02・SK03からは中世京都Ⅰ期中段階・同Ⅱ期古段階の土師器が、SK05からはそれらよりやや降る時期の土師器に加えて中国製陶磁器数片が出土している。SK06・SK07はともにA3層上面からの掘り込みで、室町中期を遡ることはないが、より下位のSD11の埋土中と同様の土師器が少量出土した。第2次調査区のSK13も、これらに類似する土坑であるが、平面は矩形を呈し、上面にびっしりとこぶし大の礫が詰められていた(図版11)。年代の指標となるような遺物はないが、近くに掘られた井戸群よりはやや上面で検出している。

SK04とSK09は、口径に比して深く掘り込まれていて、柱の抜き跡の可能性のある土坑である(図版10)。かなりまとまって土師器が出土しており、前者が中世京都Ⅱ期中段階、後者が平安京Ⅳ期古段階とみられる。

ほかにSK12は、径1.0m強で、ほぼ鉛直に約0.5m掘り込まれた土坑で、平安京Ⅳ期古段階の土師器皿が完形で多数出土した(図版11)。SK11は、東西径1.85mをはかり、ほぼ鉛直に約1.0m掘り込まれる。内部には底面に至るまで、こぶし大の河原石が比較的粗く詰まり、少量の遺物は、これら礫の投棄が近世のものであることを示している(図7)。

(5) その他

井戸以外で石を組んだ遺構が若干あるほか、埋積河道を検出している。

SX01(図版9・15-2) 造り出しのある花崗岩を西端にして、東端には一群の中で

最大の自然石をおき、この間約2.0mを東へわずかに上り勾配に、自然石を敷き並べた遺構である。南辺と北辺にはこれらに沿って別に、やや小ぶりの河原石を縁石として配する。東端手前の石敷上には、平瓦2枚が意図的に置かれた形跡がある。東西の軸方向はほぼ正方位を示す。瓦以外に共伴遺物はないが、後述するSX03と同様、図7にみられるような近世後半期以降の耕作遺構よりは古く、かつB5層の堆積よりは新しい時期におくべき遺構である。これが元来建物を伴っていたものかどうか不明であるが、これだけで単独に機能していたのではないと考える方が無理のないところで、その場合、このどちらかの端に、小祠のような建物を想定してみたい。

SX02(図版9・15-1) サブトレンチを発掘中に検出した石組で、東端部には、図中よりもさらに石が積まれていた。元来3～4段に積まれた石組で、東端が閉じていた形跡はうすい。溝SD05の西延長上にあたるが、両者の関係は確認できなかった。ただ、この石組に伴なうと考える灰釉系陶器すり鉢からみて、その年代は、室町前期とみられ、SD05と年代的に重なり合う時期があったかどうか微妙なところである。

SX03(図版10) 幅、深さともに0.3m前後、南北約7mにわたる溝状の掘形にこぶし大の河原石が詰められた石列遺構である。A2層の年代にあたる排水用の暗渠とみなしているが、関係する施設は不明である。石列の方位は真南北からわずかに東に振る程度である。層位のうえからも、方位のうえからも、石敷SX01と併行する年代を与えられよう。

SX04(図版10) SD09の東肩に沿って、平らな面を上にして置かれた石群である。整然と敷かれているわけでもなく、性格はよくわからない。

SX05(図版10) 幅0.6m、南北2.5mにわたる石敷で、このうち南半分は、各石の平坦面を上にして丁寧に並べている。これに貼り付いて出土した土師器小皿1点は中世京都I期ごろのものである。

SX06(図版11・15-3) 第2次調査区西部で検出した埋積河道である。この河道の東岸は45°前後の傾斜で東へ上がる。この斜面に厚さ5～10cm程度の青灰色粘土を南北約20m以上にわたって貼り付けている。この粘土帯は第1次調査区へも延びていた可能性が強いが発見していない。粘土帯の上端と下端との比高は、場所によって異なるが、垂直距離にして1m前後で、両端ともに、部分的に水平な面をとどめており、粘土の貼り付く斜面の上下限を示す。この粘土帯の東側では、砂礫が水平に堆積し、そのうちE13～15層中より、奈良時代の須恵器片や、弥生土器の細片が出土する。それに対し、粘土帯の西側では、東側と不連続の砂礫が、やや東下りの傾斜をもって堆積しており、粘土帯の西裾付近から

は、平安京Ⅱ期の土師器が出土した。両側の砂礫層とも、その礫種組成は高野川系の流路ないし氾濫を物語⁽²⁾る。これらのことから、その粘土帯は、平安中期に東側の砂礫が形成する斜面を保護するために人為的に施した護岸で、そのころ、高野川の河道がこの西側にまで及んでいたと考えられるのである。粘土帯の方位は、真北から西へ15°前後偏っており、流路の方向を示すものとすれば、平安後期以降に、一時期若干西へ振る遺構群が多くなる一因として考慮されるべきものであろう。

S X07(図版8) 痕跡的な河川による砂礫の堆積と考えている。E11・E12層を切る層位をなしており、中世京都Ⅰ期ごろまで、その流路を認めるべきものである。

(6) 近世以降の道路と耕作遺構

表土と耕土を排除した段階で調査区全域から検出した遺構は、主として、江戸時代から明治にかけての、耕作に伴うものであった(図7)。溝S D26, 井戸S E01・S E02・S E05・S E21・S E32, 野壺S E33~39, 柵列のほか、2列ひと組になってひとつの遺構とみなしうるラチス状遺構群がある(図版4-1)。

柵列は調査区のほぼ全域にわたって存在するが、大きく東と西の2群に分かれる。その間には、南北带状に柵列が存在しない部分があり、これが耕作地を東西に分ける境界になっていたことは明らかである。柵列はすべて東西方向に、直径10~20cmの丸太を、2.5m前後の間隔で矩形の掘形に立て並べたもので、中には3度くらいの立て替えを認めうる(図版4-2)。柵の方向はみな大差なく、北から東へ約5°振る。これらの埋土は耕土であり畑作にともなう柵と考えている。

井戸と野壺はしばしばひと組になって検出できる。S E01とS E37, S E21とS E39, S E32とS E36(図版14-6)という組合せがその例で、肥料を水と混ぜあわせて用いたことを物語る。野壺とした遺構は、みな漆喰造りの円形で、直径1.4~2.0m, 底面はかすかにすり鉢状をなす。本部構内遺跡A W28・A X28区の調査では、漆喰を用いず、素掘りかまたは木枠を用いた野壺が道路に沿って多数発見されており、S E02は、漆喰を用いずあまり深くないため、そのような野壺であった可能性がある[京大埋文研80]。石組の井戸のうち、S E01では、掘形に鶏卵大の河原石を裏込めとして詰め、石組の下側には10枚の井戸瓦を用いて筒部を造るという特徴がある。S E32は石組の下側に縦長の材を縦に埋め筒部を造るという特徴がある(図5)。

ラチス状遺構群は、柵列や野壺S E37を切って設けられており、何らかの土地利用の変化を予想させるが、その機能は不明である。この遺構も、柵列と同様に東西2群に分ける

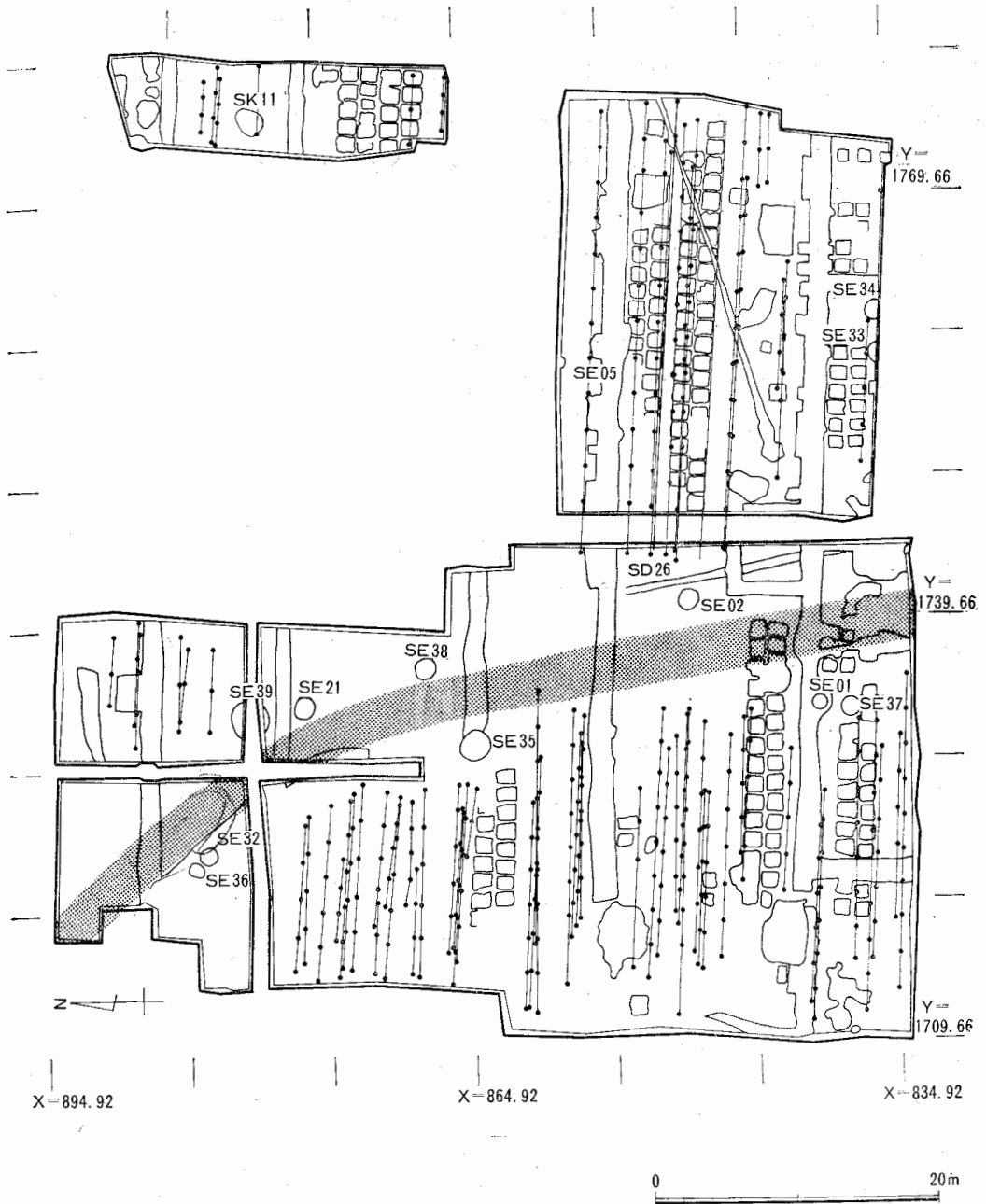


図7 近世遺構配置図

ことができ、柵列群の境界をまたぐものはない。第2次調査区の北西部では、SE32とSE36の北東側に高く0.4mほどの段があって、礫混黄灰色土(図版8-E3層)が北西から南東に向かって固く盛られている。この土層上面は路面であった可能性が強く、その路傍に井戸と野壺が並んでいたものと思われる。その南に連なる、柵列のない帯状の部分をつての道路跡とみなすことができ(図7梨地の部分)、AE14区からAF14区にかけての近世以降の井戸・野壺群がその路傍に沿っていたと推定できる。そうすれば溝SD26はその側溝となっていたのであろう。史料のうえでの考証は、後に触れる(第5章第1節)。

〔注〕

- (1) 土師器の時期区分については第4章と表2(P27)を参照されたい。
- (2) 西村進理学部助教授、石田志朗理学部助教授の御教示による。
- (3) はしご状に連なる浅い方形土坑群をラチス状遺構と呼ぶことにする。